

## 日刀保たたらでの現在の製鉄

1977 年、日刀保たたらは 30 年前に途絶えていたたたら製鉄の火を再び灯した。以来、日刀保たたらでは、現代の刀匠たちに欠かせない玉鋼の供給を続けている。

玉鋼（たまはがね）とは、たたら製錬という直接製錬でしか生産できない高級鋼のこと。玉鋼はその強度と延性の高さから、江戸時代(1603-1867)以来、刀鍛冶にとってかけがえのない材料であった。しかし、輸入された反射炉との競争や工業的な鉄鋼需要の増加に直面し、たたら製鉄所は競争に打ち勝つことができず、1920 年代に閉鎖された。1933 年に小規模な操業が開始され、軍用サーベル用の玉鋼の生産が続けられたが、第二次世界大戦(1939-1945)終結後、この試みは中断された。

その後、日本刀は美術品として広く評価され、収集することになったが、戦後、玉鋼は 5～6 トンしか残らなかった。そこで、日本美術刀剣保存協会（日刀保）が、奥出雲に伝統的な粘土製のたたら炉を設置した。

たたら製鉄の技術は秘伝であったため、日刀保は実体験を持つ人材を探し求めた。村下という重要な役割を担ったのは、若い頃に地方の製鉄炉で働いていた安部由蔵（1902～1995）と久村勸治（1903～1979）だった。彼らは木原明（1935 年生）と渡部勝彦（1939 年生）にその知識を伝え、彼らもまた弟子となり、たたら製鉄の伝統を後世に伝えていった。